

平成26年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成26年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ブリ

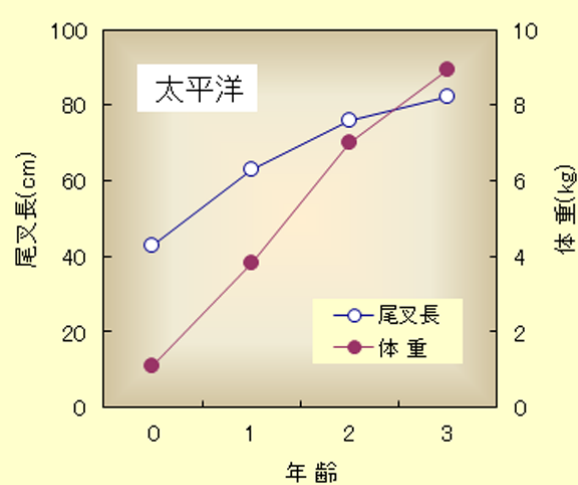
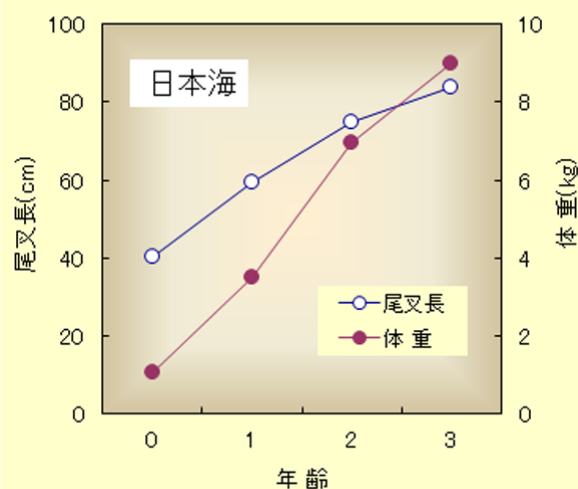
学名 *Seriola quinqueradiata*

担当水研 日本海区水産研究所
中央水産研究所



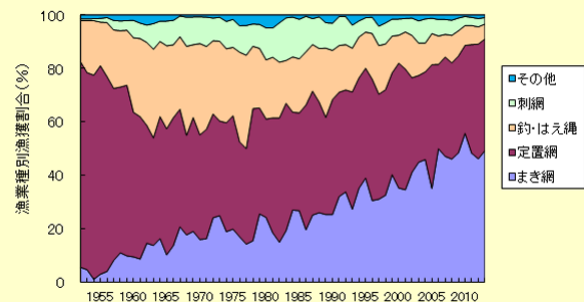
生物学的特性

寿命: 7歳前後
成熟開始年齢: 2歳 (50%)、3歳 (100%)
産卵期・産卵場: 冬～初夏 (1～7月)、東シナ海の陸棚縁辺部を中心として、九州沿岸から日本海側では能登半島周辺以西、太平洋側では伊豆諸島以西
索餌期・索餌場: 夏～秋季、九州沿岸～北海道沿岸の東シナ海、日本海および太平洋
食性: 仔稚魚は動物プランクトン、未成魚以降はイワシ類、アジ類などの浮魚類の他、底魚類
捕食者: 流れ藻に付随する時期には共食いをすることがある



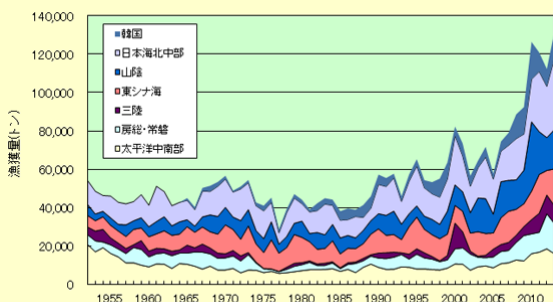
漁業の特徴

漁業の主体は定置網およびまき網である。東シナ海、山陰および房総・常磐ではまき網の割合が大きく、日本海中北部・青森・北海道、太平洋中南部および三陸では定置網の漁獲割合が大きい。また、東シナ海、三重県以西の太平洋南部でモジャコと呼ばれる稚魚は養殖種苗として採捕されている。



漁獲の動向

我が国のブリ類(ヒラマサやカンパチも含まれるが、大部分はブリ)の漁獲量は、1950～1970年代半ばには3.8万～5.5万トンであったが、1970年代後半～1980年代には漸減し、1990年以降は増加傾向にある。2013年は、過去最高の11.8万トンであった。

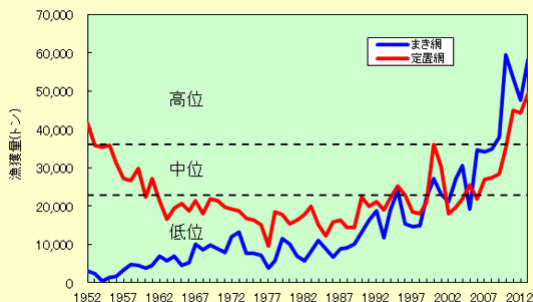
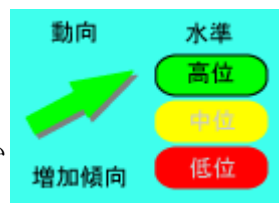


資源評価法

年齢別漁獲尾数に基づいて、コホート解析により年齢別資源尾数、資源量、漁獲係数Fを計算した。自然死亡係数Mは、寿命との経験的な関係から0.3とした。

資源状態

資源水準は、長期のデータがあり、漁獲努力量が比較的安定していると考えられる定置網の漁獲量を資源量指標値として用い判断した。定置網の漁獲量の最大と最小の間を三分してそれぞれを高位、中位、低位とすると、2013年の資源水準は高位となる。資源動向は、1994～2013年の年齢別漁獲尾数を用いたコホート解析によって推定した資源量より判断した。資源量は、2005年までは11.5万～16.4万トンで推移していたが、2006年以降増加傾向を示し、2013年は29.4万トンであった。近年(2009～2013年)の資源量の推移から資源動向は増加と判断した。



管理方策

水準・動向が高位・増加と判断されること、資源解析結果から、現状の漁獲圧でも資源に悪影響はないと考えられることから現状の漁獲圧の維持 $F_{current}$ を管理基準値とした。すなわち、ABC算定規則1-3)-(1)を用い $F_{limit} = F_{current}$ とし、 ABC_{limit} を算定した。また、 F_{target} は $0.8F_{current}$ とし、 ABC_{target} を算定した。一方で、漁獲物の年齢組成は0歳、1歳を中心とした未成魚に大きく偏っており、未成魚への漁獲圧が高いことが示されている。ブリは、漁業種類や地域によって利用している漁獲物の年齢や漁期等が異なるので、その実態を勘案したうえで、利用形態を検討する必要がある。

	2015年ABC	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	123千トン	Fcurrent	0.63	40%
ABCtarget	104千トン	0.8Fcurrent	0.51	34%

- F値は0～3+歳の平均値。ABCはブリ類としての漁獲量

資源評価のまとめ

- 2013年の資源量は29.4万トン、漁獲量11.8万トンでともに最高水準である
- 定置網による漁獲量から資源水準は高位、2009～2013年の資源量の推移から資源動向は増加
- 近年は親魚量、加入量ともに多い状態である

管理方策のまとめ

- 資源解析結果から、現状の漁獲圧でも資源に悪影響はないと考えFcurrentを管理基準値とした
- 漁獲物の年齢組成は0歳、1歳を中心とした未成魚に大きく偏っており、未成魚への漁獲圧が高い
- 海域および漁業種類毎に利用形態を検討する必要がある

執筆者: 亘 真吾・田 永軍

資源評価は毎年更新されます。